

蔵屋美香

JOSHIBI no.194



「つくる」と「みる」の両輪で。

東京国立近代美術館で数々の展覧会を手がけ、

横浜美術館の館長として新たな一歩を踏み出した蔵屋美香さん。

女子美術時代からつながるキャリアの軌跡と、

新館長としてのまなざしに迫ります。

Photo 長沢慎一郎 | eart 株式会社フリッジ



学生の興味関心の移り変わりに寛容——。私の大学生活は、そんな女子美の校風に救われました。油絵を専攻していた私は、率直に制作に熱心だったほうではありません。むしろ大学生活というモラトリアム期間を、悩みつつ過ごしたタイプでした。

幼少期から絵が得意で、美術好きの親と美術館へと足を運ぶ機会も多かった私にとって、女子美への進学は自然の成り行きでした。ところが実際に入ってみると、課題にも身が入らず、図書館で本を読みあさる日々。「絵のために入学したはずなのに……」と悩むこともありましたが、それでも、今考えると読書こそが期せ

ずして豊かな言語表現のインプットになつていたので。卒業後に進んだ大学院や、その後に就いた芸員の仕事では、美術を言葉で説明する能力が求められました。作品に解説や批評を加えるには、ビジュアルイメージをテキストに変換する必要がありました。読書にあけくれた経験が、その訓練になつていたとは、在学当時は思いませんでした。

女子美で絵を描いていたことも、キャリアの大きな助けになりました。芸員のなり手として一般的なのは、人文学系の学科で美術史を専攻してきた人たちです。私のように美大で制作をしていた人は少数派ですが、

作り手の立場を経験していると、作品を見ただけで筆の動きが手にとるようにはわかりません。そこから、作者の視線の移ろいや思考の流れまで想像できるのです。自分ではあたりまえのように感じていた私のアートへの向き合い方が、自分の個性だと知ったのは、東京国立近代美術館時代に研修の一環でロンドンに滞在し、ひたすら美術館を巡っていたときのこと。音声ガイドダンスに耳を傾けながら作品を前にしていた際、鑑賞する側の欲求にはたと気づいたのです。美術館を訪れる観客が作品を前にした瞬間に何を求めているのか。歴史的なデータを知ることが大切ですが、本当はもっと目の

蔵屋美香（くらや・みか）

横浜美術館館長。女子美術大学芸術学部絵画科洋画（油絵）専攻卒業。千葉大学大学院教育学専攻修士課程修了。1993年より東京国立近代美術館に勤務。2020年4月より現職。主な企画に「めぐ絵画—日本のヌード1800-1945」（2011-12年、東京国立近代美術館）、第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館キュレーター（2013年、アーティスト：田中功起）、「高松次郎ミステリーズ」（2014年、東京国立近代美術館、保坂健二郎、榎田倫広との共同キュレーション）、「熊谷守一：生きるよろこび」（2017-18年、同）など。



前の作品の色や形の見方や解釈の仕方を知りたいはず。作り手の視点を、身をもって学んだ私なら、観客のニーズに合った解説ができる。それが強みになると思い至りました。

女子美での学びは、展示のレイアウトを考える上でも役に立っています。来館者の視線の動きや導線を考

えながら、作品をさまざまに組み合わせ、空間に配置する行為は、創作活動さながらです。一方で、美術史に関する文献にあたり、歴史的背景を学ぶことも、作品を深く理解する上では絶対に欠かせません。作り手の視点と、大学院時代に得た美術史の知識。ふたつを掛け合わせれば、もっ

と魅力的な企画ができる。それに気づいたことが、学芸員として飛躍するきっかけとなりました。

2020年には、横浜美術館の館長に就任しました。現在工事休館中ですが、リニューアルオープンに向けて、新しい取り組みを模索しています。例えば、館内にある「市民のアトリ



エ」を活用し、スタッフによる作品の解説のあとに、お客様にも同じ技法で制作していただくプログラムなど。こうした体験を通じて、美術館の楽しみ方の幅がいつそう広がります。今後の目標は「多様性」をキーワードに、横浜の地域性を生かした美術館運営を実現すること。160カ国11万人もの外国籍の方が暮らすこの街にふさわしい文化交流の拠点となる場にしていきたい。同時に、みな

とみらい以外の地域からも多くのお客様に足を運んでいただけるよう、魅力の発信に努めていきます。

改めて女子美での4年間を振り返り、胸を張って言えることは、たくさん。「寄り道」や「迷い」こそ、かけがえない体験だったということ。将来へつながると思わずに取り組んだ多くのことが、結果として役に立っているのですから。アートが自分と切っても切り離せない存在に

なった今、「つくる」と「みる」の両方の視点を育ててくれた女子美時代のありがたみが、いつそう大きく感じられます。何が人生を方向づけるかなんて、その瞬間にはわかりません。学生時代は、与えられたルールに収まるだけではなく、別の世界を覗いてみた方がいい。将来を花開かせる種は、意外なところに落ちているものだからね。



芸術家を目指す美大生の夢の実現をサポートする

「芙蓉・女子美 Venus フォンド」を設立

本学と芙蓉総合リース株式会社は、「芙蓉・女子美 Venus フォンド」を設立しました。7月5日に協定書調印式が行われ、芙蓉総合リース株式会社の辻田泰徳代表取締役社長と本学の福下雄二理事長が参加しました。

「芙蓉・女子美 Venus フォンド」は、学生が芸術家として社会に羽ばたくためのサポートと、学生の夢の実現に寄与することを目的とし、学生が制作した作品展示の「場の提供」を行う活動面と、それらにかかる資金面の両面からサポート

するものです。芙蓉総合リース株式会社が持つ、多くの企業とのリレーションを生かして、作品を展示する「場の提供」に取り組みとともに、展示場所に相応しい作品を学生から買い上げます。そして本学は、最適な作品を監修・選定するなどのサ

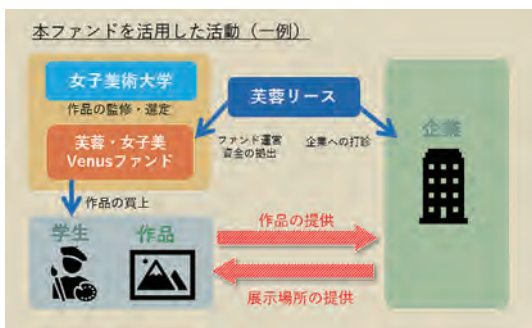
ポートを行い、双方連携の上、「芙蓉・女子美 Venus フォンド」の活動を推進します。芸術家を目指す学生を積極的に支援するとともに、新たなアートを社会へ還元することにより、日本の芸術文化の振興に寄与・貢献することを目指します。



調印式の様子
(左)芙蓉総合リース株式会社 辻田代表取締役社長(右)女子美術大学 福下理事長



(左)芙蓉総合リース株式会社 辻田代表取締役社長
(中央、右)女子美術大学 小倉学長、福下理事長



芙蓉・女子美 Venus フォンド

客員教授 假屋崎省吾先生 オンライン特別講義 開催

本学客員教授であり華道家の假屋崎省吾先生による特別講義を、6月4日に短期大学のオンライン授業として開催しました。假屋崎先生のご自宅である花サロンからGoogle Meetを使用して配信されました。まず初めに、いけばなのパフォーマンスが行われ、大きな陶器の花器を使用し、花材にはご自宅に生えていたという白の紫陽花を使い、ダイナミックな迫力のある作品を完成させました。その後スラ

イドを使った説明では、假屋崎先生の幼少期からアーティストとして活躍する現在までの道のりについてお話いただいたほか、これまで制作された作品の紹介として、いけばなの作品や企画展、個展やシヨールームのシヨップデザインなどを、当時の写真とともに幅広くご紹介いただきました。最後の質疑応答の時間では、学生からたくさん質問が寄せられ、笑顔で答える姿がとても印象的でした。



奥村 鞆正 客員教授

特別講義開催



10月23日に相模原キャンパスにて芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻客員教授の奥村鞆正先生による特別講義が開催されました。本講義に参加する学生はテーマに沿った課題を制作し、最終講評として奥村先生に講評をいただきます。今年のテーマは「PLASTIC」。会場には平面、半立体、映像、ゲームなどさまざまな作品が集結しました。学生たちがテーマをどのように解釈し、表現したのかを聞きな

がらそれぞれの作品を講評。講評の様子はYouTubeでライブ配信も行われました。ユニークな技法で作られた作品に、先生方からは「新しいアプローチが面白い。どうやって作ったのか一見わからないものもあって、今後も発展させてほしい。」という声もあり、手にとって身近でじっくり観察する場面も。最後は優秀賞2作品が発表され、在学生や教員、たくさんの方が見守るなか特別講義は幕を下ろしました。



オンライン女子美祭 2021

10月22日〜24日の3日間、女子美祭の特設サイトや動画配信、各種SNSにて「オンライン女子美祭2021」が開催されました。「トロピカル」をテーマに掲げ、杉並・相模原両キャンパス女子美祭実行委員の学生たちが合同で様々な企画を実施。オンラインならではの企画として、作品制作動画や専攻紹介、女子美あるある、をYouTube上で公開しました。また、昨年引き続きYouTubeでゲスト出演動画を1日限定で配信し、10月23日は「チョコレートプラネット お笑いライブ」、10月24日は「小野友樹×土岐隼一 声優トークショー」を公開しました。その他にも、特設サイト内での学生有志による作品展示・販売の企画等を公開し、それぞれの活動や制作した作品等を発表する良い機会となりました。



「じょしりき【女子力】展」が2年ぶりに開催!

9月10日から12日までの3日間、デザインフェスタギャラリー原宿にて「女子力【じょしりき】展」が行われました。

女子力展とは、女子美生が持つ「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」をテーマに、杉並キャンパスと相模原キャンパスの両校地の学生が一挙に集い、それぞれの思いを込めた作品を披露することのできるイベントです。昨年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止を余儀なくされましたが、今年は感染予防対策を講じた上で2年ぶりの開催となりました。

立体作品の展示だけでなく、オリジナルのイラストやアクセサリーなどの販売も行いました。また、新たな試みとして、オークション展示販売を実施しました。会期中にはインスタライブを実施し、出展作品についての紹介なども行いました。コロナ禍でなかなか自分の作品を展示・販売することができなかった学生たちにとって、多くの人に自分の作品を見てもらえる同時に、他の出展者の作品を見ることで、今後の自身の制作活動において大きな刺激となりました。今回も、女子美生が持つ多種多様な「女子力(じょしりき)」によって生み出されるリアルな「女子美ワールド」埋め尽くされた展覧会になりました。

小野寺綾

なぜ海外で活動・仕事することを選んだのですか？

Q1 私は卒業後に編入をしたかったのですが金銭的に難しく、アーティストのアシスタントのアルバイトをしました。そのアーティストがドイツの芸術大学を卒業しており、ドイツならば学費なく勉強できることを知り、大きな希望の光となりました。家族に金銭的負担をかけずに自分の好きなことを勉強できる道があるのかとドイツに大きな感銘を受けました。ドイツの芸大・美大についてたくさん調べ、ベルリン芸術大学に進学したいと思いが固まり、分厚い辞書を片手に応募要項を一字一文字翻訳しました。アルバイトをしてお金を貯め、21歳の時に一人で人生初めての外国であるドイツに移住しました。飛行機も初めてで、スーツケースの重量制限も知らず、成田空港では30kg以上の重量オーバーだったり、ファイナルアナウンスで自分の名前が呼ばれたり、ドジばかりで今思えばよくドイツに一人で行けたなど笑ってしまいます。本心はとても怖くて逃げ出したい気持ちもあったのですが、今勇気を出さないと一生無理だという強い想いがありました。

女子美時代は、どんな学生でしたか？

Q2 宮城県から上京して来たこともあり、全てが新鮮でした。絵画科の同級生達も個性豊かな子が多く、夜遅くまで一緒に絵を描いたり、徹夜で絵やアートについて話し合ったり喧嘩をしたり、とても貴重な時間を共有でき一生の宝物になったと思います。誰も知らない場所で生活が始まることで、もっと自分や周りに素直になりたいと思いました。高校までは自分の気持ちを友達や他の人に伝えることがとても難しかったのですが、女子美では自分自身を開いていくことを意識し、いつも正直に先生や同級生とも接していました(その節は皆さん大変ご迷惑をおかけしました!)。今思うとそれは自分自身を成長させるための通過点でした。その時に養った自分を開いていくこと、素直さ、正直さはドイツや海外で過ごす上でとても大事なコミュニケーションツールになりましたし、生きていく上で楽になったことの一つだと思っています。

女子美時代の印象深い思い出を教えてください。

Q3 卒業制作でロールキャンパス10mを使って、どこまで自分のアイデアは尽きないのか実験したことです。講評の時に、時間のない先生方にどうやって10m全体を瞬で見せられるだろうかと考え、校舎の裏庭に10mの絵を掲げて、先生方が来た時に「私の作品はこちらです」と言って窓の外を指し、3階の窓から地上にある10mの絵を見てもらったのですが、何も知らなかった先生方は「なんじゃ、こりゃあ!!!」とまさに目が飛び出すように驚かれていました。同級生達は大笑いで、私のマイベースさと絵に対する情熱を面白がってくれ、卒業制作のクラス全体にすごくいい活気が生まれていました。一生懸命さや情熱、純粋な気持ちは人の心に伝染するし、それが自分にも返ってくることを肌身で感じられた体験でした。当時のアトリエ仲間のことは今でも大好きですし、不器用な私を受け入れてくれたこと、貴重な時間を共有できたことにも感謝しています。先生方にとってはかなり扱い方が難しい学生だったと思うのですが、良い距離感で優しく見守ってくださったことには大きな感謝でいっぱいです。

美大の中でも、女子美を選んだのはなぜですか？

Q4 私は小さい頃から学校で一番背の高い子でした。小学生から中学生までクラスの男子にはいつも背が高いことをからかわれて、同世代の男子がとても苦手でした。高校で女子校に入ったのですが、驚くほどに居心地がよく、初めて学校が大好きになりました。背が高いことをからかってくる女子はいなく、逆に背が高いことを褒めてくれ、心がじんわりと温くなりました。女子と一緒に勉強することもとても協力的で安心でき、女子ならではの盛り上がりなど、とても充実した時間を過ごせました。美術部もお洒落で個性豊かな子が集まっていたので、友達が一気に増えました。顧問の先生ともすごく仲良くなり、みんなのお姉さん的な存在でした。その先生は女子美を卒業されており、女子美がとても楽しかったことをよく話されていたので、女子美に進学することは自分の中で信頼できる道の一つに自然となりました。

制作・仕事をする上で大切にしている考え方を教えてください。

Q5 全てのシリーズに終わりを持たせることです。これは女子美時代の卒業制作でも学んだことですが、アイデアというものは際限なく出てくるものです。ただそのアイデアやイメージが常にクオリティーの高いものとは限りません。それはアーティストが自分自身で選別していくべきものだと思うのですが、私は自分の前作シリーズと同じ絵や似たような絵を描いていくことを自分に禁じています。それは手癖から来るもの、あるいはインスピレーションの枯渇に繋がることと感じており、何かを創造する人間にとって非常に危険だと思っています。一つのシリーズに人気があっても、そのシリーズを終わらせないとそのシリーズの絵しか描けない手と脳になってしまうと感じているので、一つのシリーズで到達点を越えた時が終わりのサインであると思っています。それにより、また試行錯誤していくことで新しいシリーズが始まるので、自分自身と絵の成長にも繋がっているのだと思います。

大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。

Q6 ベルリン芸術大学を卒業して長年働いていたのですが、人生面白いことに、私はまた大学生になりました。今年からドイツのハンブルグ芸術大学院にてマスターを始めました。院生も4年制も担当教授が、緒だと同じクラスなので、自分より一回りも離れている子達が同じクラスにいるのですが、みんなものすごく純粋に私の絵画に興味を持ってくれて質問攻めされるので、とてもフレッシュな良いエネルギーを貰っています。大学時代は尖っていても飛び抜けていても若干クレイジーでもいいので、興味のあることに一直線に向かってたくさんを経験して、いろんな人とコミュニケーションをとってみてください。卒業したら、制作は基本一人ですものになるので、在学中はその場にいることを存分に生かしてみてください。情熱というエネルギーは他の学生や先生、家族にも伝わり、あなたの新しい道を照らしてくれるはずで、そして何歳になっても興味のある国の言葉を学ぶこともお勧めします。移住するしないにかかわらず言葉を学ぶことはその国の文化や歴史やメンタリティーを学べますし、フットワークが軽くなります。自分の中の世界が大きく広がりますよ。

海外で制作・仕事をする事の“楽しさ”を教えてください。

Q7 今在籍しているマスタークラスのプレゼンテーションで絵を見せた瞬間、教室の空気が変わり、国際色豊かな学生からの質問の嵐になったことがありました。絵は、生まれきた背景、世代、国籍、言葉を簡単に超えるものだと思いが立ちました。絵で伝わる感覚はとても深いものがあります。どんなに話していても入れないような他人の心の奥深くには絵は自然と入っていくのだと感じます。生まれた背景も言葉も宗教も全く違う人達が私の描く絵に共感してくれた時、私は少し涙目になってしまいます。芸術の力は偉大で、国境を越えて誰かの心に届くことができるとき、それは一つの奇跡のような気がして感動してしまいます。

やりたいことや夢を実現するためのヒントを教えてください。

Q8 自分がやりたいことや夢も継続していくことが大切だと思っています。最終的には人として、仕事相手として信頼されることが大事なので、創るものの形やジャンルは変わっていったとしても、自分が大事にしていること、やりたいことは続けてほしいですね。夢の実現にはいろんな方法があり、長い人生いろんなことがあります。近道もあれば遠回りもありますが、どちらにも大変なことはありますし、はずれだとか当たりだとかは最終的にはないような思います。大事なことは他人と自分を比較しないこと、そして一番大事なご自身の長所をどうぞ忘れずに、自分のやりたいことや夢にどうか自信を持ってチャレンジしてみてください。

後輩(女子美生)に一言メッセージをお願いします。

Q9 あなたにはたくさんの未知なる可能性が眠っています。それを育てていくのも信じていくのもあなたしかいません。女子美仲間として心からあなたを応援しています!



『Fragments 3』180×200cm, Oil, coloured pencil on cotton, 2014, Rias Ark Museum of Art, Photo: Conrado Velasco

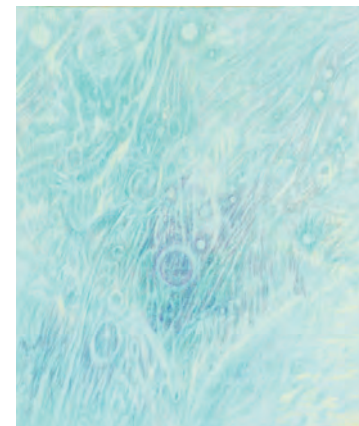


Universität der Künste Berlin, 2012, Photo: Studio dA



小野寺 綾 (おのでら あや)

宮城県気仙沼市生まれ。2021年よりハンブルグ芸術大学造形学部絵画科修士課程に在籍。2022年ロンドン、ベルリン、塩竈市にて展覧会開催予定。2005年に女子美術大学短期大学造形学科美術コースを卒業後、ドイツ・ベルリンへ渡り、2007年からはベルリン芸術大学造形学部絵画科の教授らへ師事。卒業後もドイツを拠点に油彩、色鉛筆を中心とした絵画作品を制作、発表し、イタリア、ギリシャ、韓国などのアーティスト・イン・レジデンスに招待され、国内外で高い評価を得ている。
www.ayaonodera.com



『Spürenelement 2』72×60cm, Coloured pencil on canvas, 2018, Photo: Kazunori Kumagai

AYA ONODERA HAMBURG

AYA ONODERA HAMBURG



05 | 佐倉市のマンホールを 在学生在がデザイン

本学プロダクトデザイン専攻4年生の中島望里さんが、千葉県佐倉市のマンホールをデザインしました。佐倉市と本学は「連携共働に関する協定」を平成24年に締結し、「多くの方々に下水道について、関心を持ってもらうこと」を目的に、佐倉市がデザインマンホールの製作を実施。連携事業として本学にデザインを依頼いただきました。佐倉市の花々である桜、チューリップ、花菖蒲、コスモス、竹を文様化しデザインに取り入れたマンホールは、市内5箇所に設置され、さらにマンホールカードを発行し2022年1月から無料配布を行う予定です。



04 | 小倉文子学長が 功労表彰されました

10月9日に東京エレクトロン美術館にて執り行われた「美術館市制施行67周年記念式典」において、本学の小倉文子学長が美術館より功労表彰されました。今回の表彰は、長年にわたり美術館大村美術館の運営をはじめとする美術館協会の委員として、市政発展に尽くされた功績が讃えられたことによるものです。

「美術館大村美術館」は、2007年に本学名誉理事長の大村智先生が山梨県美術館に開設した美術館です。40年以上に渡って先生が蒐集された美術作品を収蔵しています。優れた数々の美術作品は、個人だけで楽しむものではなく、人類全ての共有財産であるという先生の思いから、2008年に美術館を美術館へ寄贈。全国でもあまり例を見ない女流芸術家たちの作品を展示の中心に据えることで、美術館の特色を生み出し、本学卒業生の作品も数多く収蔵されています。



01 | 福下雄二理事長が 瑞宝重光章を受章しました

令和3年春の叙勲において、福下雄二理事長が瑞宝重光章を受章しました。

【略歴】

1950年 生まれ	
1974年 東京大学経済学部卒業	2007年 内閣府賞勲局長
2001年 内閣府大臣官房総務課長	2009年 内閣府審議官
2003年 経済産業省大臣官房審議官	2012年 学校法人女子美術大学理事
2004年 内閣府大臣官房審議官	2015年 学校法人女子美術大学理事長

NEWS — & — TOPICS



『イスタンブールの朝焼け』1975年

06 | 訃報 入江一子先生が ご逝去されました

本学卒業生で洋画家の入江一子先生が、8月10日、105歳でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。入江先生は、1938年に女子美術専門学校(現:女子美術大学)師範科西洋画部を卒業後、洋画家である林武画伯に師事し、以降、独立美術協会会員、女流画家協会委員(創立会員)として活躍されました。1970年代からは、一貫してシル

クロードの風物や辺境に生きる人々を描かれ、斬新な構図と明るい色と光に富んだ画風で、独自の世界を確立しました。2013年には、後進育成に尽力される一方、93歳でニューヨークにて個展を開催するなど、70年以上にわたり画壇の第一線を歩み続けておられる功績が称えられ、第1回「女子美術賞」を受賞されました。



03 | ICAF 2021 今年もオンラインにて開催

2002年にはじまり、今年で19回目を迎える学生アニメーションの祭典「インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF) 2021」が、昨年に引き続きオンラインにて、9月18日～10月3日に開催されました。今年は本学を含め、全国から25校の学校が参加。各校の教員によって推薦された学生のアニメーション作品190本が集結し、総上映時間は12時間を超えました。本学からは、芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域の学生作品7本が上映されました。

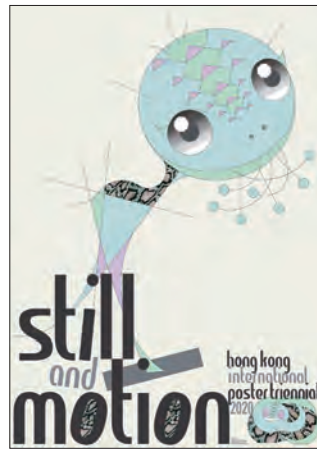


02 | 在学生の作品が ユニコムプラザにて展示

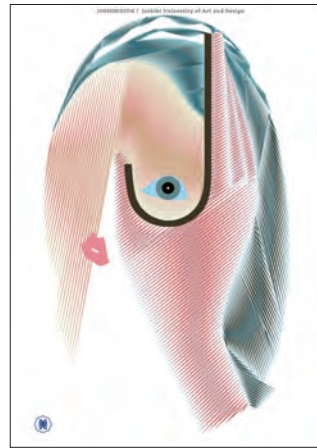
本学大学院美術研究科美術専攻博士前期課程立体芸術研究領域2年の増井萌さんの作品『Objective room』が、ポーノ相模大野内にあるユニコムプラザさがみはら(相模原市市民・大学交流センター)にて展示されています。2021年3月に東京都美術館で開催された女子美術大学学生選抜作品展「JOSHIBISION2020」で増井さんの作品をご覧になった方からの推薦があり、展示が決定いたしました。360度全方位から楽しめる展示となっています。お近くにお越しの際はぜひご覧ください。

「第13回世界ポスター トリエンナーレトヤマ2021」にて 奥村 毅正 客員教授、 澁谷 克彦 教授が銅賞を受賞

第13回「世界ポスタートリエンナーレトヤマ2021 (IPT2021)」にて、本学デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻の奥村毅正客員教授と澁谷克彦教授が、応募総数5,926点の中からそれぞれ銅賞を受賞しました。澁谷先生の受賞作品は、今年3月に開催された大学院・大学・短期大学部選抜学生作品展および付属高等学校卒業制作展である「JOSHIBISION 2020」のポスターです。受賞作品は、7月より富山県美術館にて展示され、その後IPT2021のダイジェスト版である「デザインコレクションIII IPT2021セレクションー『第13回世界ポスタートリエンナーレ2021』全受賞作品と海外入選作品より」においても展示されました。



奥村 毅正
『香港国際ポスター・トリエンナーレ2020
Still and Motion』2020



澁谷 克彦
『JOSHIBISION 2020』2020



07 | 株式会社フジダン・株式会社丸井 草加マルイ 連携プロジェクトの講評会が行われました

本学プロダクトデザイン専攻と株式会社フジダン・株式会社丸井 草加マルイとの連携授業の講評会が行われました。本プロジェクトではダンボール素材の可能性を広げ、環境貢献も達成する提案が行われました。今デザイナーに求められているのは、専門領域のスキルだけでなくとどまらずストーリーからモノづくりをすること。提案にふさわしい

ターゲットに向けて魅力的に伝えるまでの一貫したデザイン力を養うことが本プロジェクトの目的です。授業成果は2021年12月8日～10日に東京ビッグサイトで開催された国内最大の環境展示会「エコプロ2021」にも出展しました。

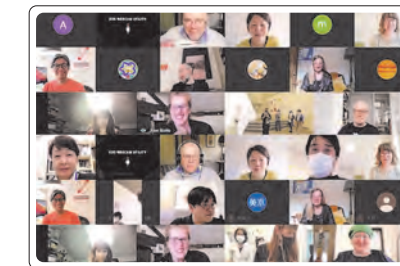


「GLP ALFALINK相模原」内の イルミネーションを在学生が 制作しました

2021年11月11日、相模原市で建設中の大規模多機能型物流施設「GLP ALFALINK相模原」街びらきイベントにて、本学学生5名がデザインしたイルミネーションの点灯式が行われました。「GLP ALFALINK相模原」は日本GLP株式会社が「物流をもっとオープンに」をコンセプトの一つとし、「より地域に開かれた魅力ある施設」とする目的で建設されました。そのオープニングイベントの一つに本学学生が協力し、2021年7月より本プロジェクトが始動しました。学生たちがデザインしたイルミネーションは、2022年2月28日までの間、毎日17時から22時まで点灯されています。



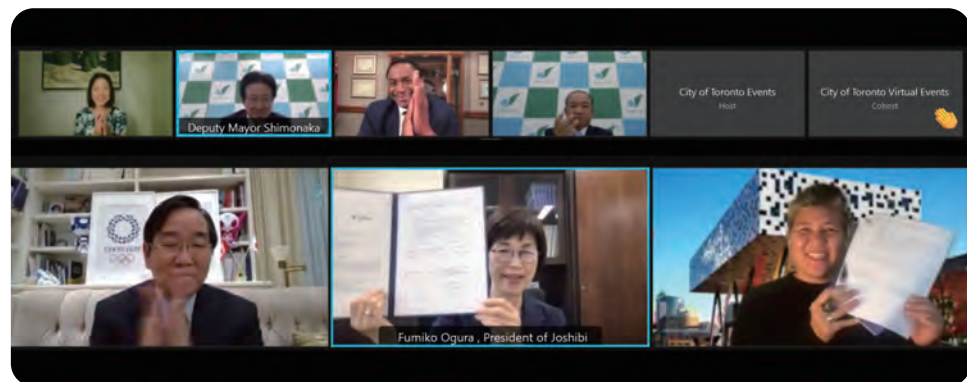
(中央)日本GLP株式会社 帖佐義之社長
(右から3番目)相模原市中央区 田野倉和美区長



08 | Island Nations-島国 女子美術大学 × バーミンガム・シティ大学交流展覧会

本学の学術協定校であるイギリスのバーミンガム・シティ大学と本学教員による交流プロジェクトの展覧会として、「Island Nations-島国」が5月10日～5月28日の期間、本学相模原キャンパス内のJoshibi SPACE1900およびSWITCH Laboにて開催されました。「イギリスと日本は、それぞれ異なる性質、礼儀作法や伝統を持つ複数の島で構成されている」という共通項に着目し、本企画は生まれました。本来は、

昨年7月にイギリスで行われる予定でしたが、新型コロナウイルスの世界的蔓延により延期されました。そして今回、日本での展示をまず先に行うこととなり、航空便で作品が届けられました。初日の5月10日には、本展覧会のオープニングイベントが開催され、各アーティストによる作品紹介が行われました。イベントは、会場からのライブ配信により日本とイギリスを繋ぐオンライン形式で開催されました。



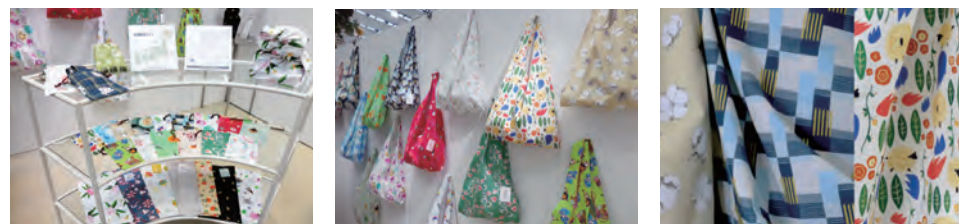
12 | OCAD大学(カナダ)との協定締結署名式と共同授業が行われました

Gatherings 2021: Studio Work Exhibition



カナダで最大規模の芸術・デザインの教育機関であるOCAD大学と女子美術大学の協定締結署名式が、6月30日に「相模原市・トロント市友好都市提携30周年記念式典」のオンラインイベント内で行われました。協定締結署名式にはOCAD大学のアナ・セラノ学長と、本学の小倉文子学長が出席しました。また6月14日～7月16日の期間、

OCAD大学のニコル・コリンズ先生と本学のリンダ・デニス先生が担当し、「Eco-Feminism Material and Touch」「Touch The World: 女性と環境」をテーマに共同授業を行いました。授業の成果はWEBサイト「Gatherings 2021: Studio Work Exhibition」にて公開しており、両大学の学生の実験的作品や共同制作の作品をご覧ください。



13 | rooms 43 へ『ジョシビ・タンダイ』が展覧

国内外のクリエイターを独自の視点で発信するイベント「rooms 43」に、本学短期大学部デザインコーステキストの学生が、ブランド『ジョシビ・タンダイ』として展覧しました。今回はSDGsをテーマに、日本の伝統ある生地の産地をテキストでデザインシミュレート。知らない街を旅したくなる物語あふれるエコバッグや風呂敷を作りました。会期中にはトークイベントが開催され、「5年後のわたしたち」をテーマに現役大学生と卒業生が今考えていることについて話し合いました。



11 | 在学生在コンペティションにて3作品受賞

本学プロダクトデザイン専攻3年生の左部裕香さんは、今春に6つのコンペティションに応募。内3作品が受賞いたしました。春休みはフィンランドへ交換留学を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で断念せざるを得ない状況に。さらに外出を制限された環境下でも自主的に活動をしようと多くのコンペティションの参加に至ったそうです。



- 2021年日・クウェート 外交関係樹立60周年 公式ロゴマークデザイン 最優秀賞
- ウィング高輪 アート・デザイン コンペティション 2021年6月 月間最優秀賞
- CHIFURE DESIGN COMPETITION 2021 (ちふれデザインコンペティション2021) ふきとり化粧水部門 佳作



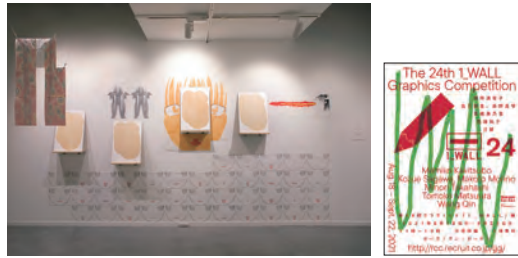
こちらのロゴマークは応募のあった160点の中から最優秀賞に選ばれました。両国の国旗の色や図形を用いた「60」という数字に加え、日本を象徴する桜の花とクウェートの美しい海を連想させる波のモチーフによって、果てしなく広がり、繁栄する二国間のつながりが表現されています。このロゴマークは、両国における60周年記念事業等において使用されます。



品川・高輪の商業施設「ウィング高輪」が、“OFFになれる場所”“明日がんばるための元気をくれる場所”をテーマに作品を募集。今日はどんなものに会えるのだろうというワクワク感やキラキラとした夢心地を表現した左部さんの作品は、特設WEBサイトにキービジュアルとして掲載、また作品をレイアウトした広告ポスターが施設内に1ヵ月間掲示されました。



募集テーマは“あたりまえ”な生活の中に見つける幸せ。です。左部さんの作品『心ときめく』は商品を手にした人の「小さな幸せ」になることを目指し、化粧水のボトルに光があたった際にスタンドグラスのようなきらめきに見えるようデザインしました。ひとつひとつのきらめきの中には、ありふれた日常の幸せが描き込まれています。



18 | 第24回グラフィック「I_WALL」展 佐川梢恵さん グランプリ受賞

第24回グラフィック「I_WALL」展にて、本学デザイン・工芸学科
ビジュアルデザイン専攻卒業生で、2019年度の本学DMのイ
ラストを担当した佐川梢恵さんがグランプリを受賞。「I_WALL」
展とは、株式会社リクルートホールディングスが企画・運営する
コンペティションギャラリー「ガーディアン・ガーデン」にて行わ
れる個展開催の権利をかけた公募展企画。佐川さんは、架空
の人物である森野真琴と自身の2人による作品を通じたコミュニ
ケーションの試みを出品しました。グランプリ受賞に伴い、佐川
さんの個展がガーディアン・ガーデンにて開催される予定です。



17 | 未来のものづくりのあり方を考える プロジェクト「SPEED FLAT 2021」

「スピード」と「フラット」の2つの言葉を通じて未来のものづくりの
あり方を考えるプロジェクト「SPEED FLAT」。10月27日～31日に
多摩美術大学八王子キャンパスアートテークギャラリーにて開催
された「SPEED FLAT 2021」では、本学デザイン・工芸学科ヴィ
ジュアルデザイン専攻の有志17名が参加しました。今回は「海外
旅行ツアー by スマホ」をテーマに早稲田大学表現工学科との
共同プロジェクトとして企画・制作しました。また、昨年度から引
き続き、メインビジュアルは澁谷克彦教授が作成いたしました。
(指導教員: 栗辻美早教授・澁谷克彦教授・林規章教授・松山智一教授)



14 | 「Romei」デザイナー 林宏美さんの特別講演

10月11日に、本学相模原キャンパスにて、本学工芸科織専攻卒業生
で、ファッションデザイナーの林宏美さんをお招きし、特別講義-「好き
と生きる-が開講されました。林さんは2010年から「VIEW IS VIVID」と
いうコンセプトで、ブランド「Romei (ロメイ)」を主宰。使うことで気分
を高める、色鮮やかで遊び心がある製品は、お気に入りの景色や建築
がデザインの要素となっています。講義では服やバック、食器などのプ

ロダクトの素材や技法について丁寧に解説し、また東京都からの依頼
で、自給自足可能な素材の一つ、ビッグスキン(豚革)を使ったコレク
ションについてもお話しいただき、学生達は直感的な「好き」の気持ち
を大切にすることを学びました。聴講後は持参して頂いた製品やアイデ
アスケッチなどにも触れ、多くの刺激を受けた時間となりました。



2021年6月15日(火)発売「アメリカ合衆国×八
王子市×台湾ホストタウンフレーム切手」下段中央
「八王子織物」のモチーフとして採用

19 | 「2020 MULBERRY CITY ネクタイデザインコンペ」にて 在学生在が東京都知事賞を受賞、切手にも採用

今回で6回目となる八王子織物工業組合のオリジナルブランド
「MULBERRY CITY (マルベリーシティ)」が主催する「2020 MULBERRY
CITY ネクタイデザインコンペ」で、本学デザイン・工芸学科工芸専攻4年
(受賞時3年) 織コースの管静怡さんがデザインした『Hope (希望)』が
東京都知事賞を受賞いたしました。このネクタイは製品化され、組合の
直営ショップである「BENECK」店舗やオンラインショップにて購入が可
能です。また、このネクタイは、八王子市と日本郵便株式会社東支社

が企画した「アメリカ合衆国×八王子市×台湾 ホストタウン フレーム切
手」における、八王子織物のモチーフとして採用されました。フレーム切
手は、東京2020大会の開催を契機に、八王子市が米国と台湾のホスト
タウンになったことを記念して作成されたものであり、八王子市内の郵
便局、東京中央局及び大手町局(計63局)で販売いたしました。現在は
「郵便局のネットショップ」にて購入ができます。

※「フレーム切手」は日本郵便株式会社の登録商標です。



16 | JOSHIBI 国際交流チームが結成

国際交流・異文化理解をしたい、交流イベントを企画・運営し
たい、学年・学科・専攻・国籍を超えた交流でコミュニケーション
スキルを高めたい、といった熱意のある学生たちが集まる
JOSHIBI国際交流チームが今年4月に結成されました。前期は
オンライン開催という形で、協定外国人留学生の歓迎会、日
本人学生と留学生との交流会、海外留学体験交流会を実施
しました。そして、9月18日には武蔵野美術大学とのオンライン
学生交流会を開催しました。また、後期より毎月第4水曜日を
「JOSHIBI国際交流DAY」と定め、第1回の9月22日には「中国
切り絵ワークショップ&プチ中国語講座」を開催しました。



『ここから』

15 | 高橋まり子助教 「第48回創画展」にて 創画会賞受賞

「第48回創画展」が、2021年10月24日～31日にかけて東京都
上野にある東京都美術館にて開催。日本画公募作品242点
および創画会会員作品50点 遺作1点、計293点が展示されま
した。この展覧会にて、本学芸術学部美術学科日本画専攻助
教である高橋まり子先生の作品『ここから』が、応募作品393
点の中から創画会賞を受賞しました。



22 | 女子美 × ハートツリー株式会社 TOKYO WOOD BAG PROJECT

本学とハートツリー株式会社との産学連携プロジェクト「TOKYO WOOD BAG PROJECT」は、アートやデザインの手で持続可能な社会の創造を目指すデザインプロジェクトです。このプロジェクトでは東京産の木材から作った糸、「木糸」を使用して、本学の学生が「同世代に向けたバッグ」のデザインを考案しました。学生の皆さんは、日本の森林と木材の現状、森林がある地域環境のリサーチを行い、バッグ

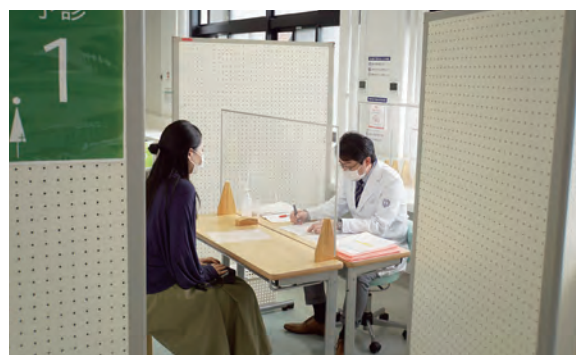
を使用する様々な場面を想定し、製品に至るまでのストーリーを考え企画しました。その成果として、本学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域の学生2名がデザインしたバッグの試作が、東京ビックサイトにて開催されたFaW【ファッションワールド東京2021秋】内の「第1回 国際 サステナブル ファッション EXPO秋」にて展示されました。



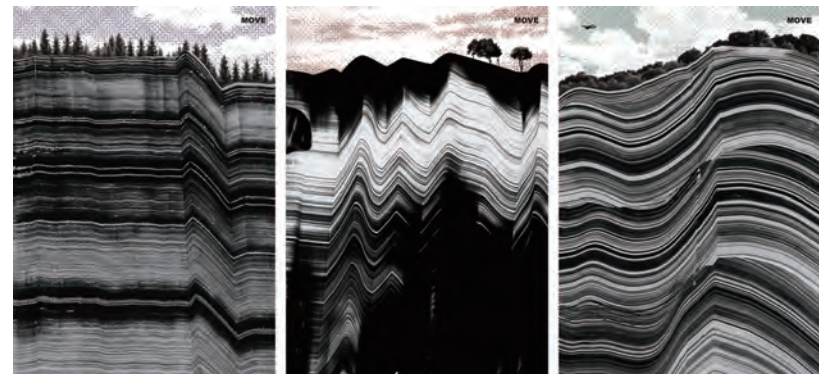
相模原キャンパス

23 | 職域接種を実施しました

8月下旬から9月下旬にかけて、本学相模原キャンパスおよび杉並キャンパスにて大学拠点接種（職域接種）を実施しました。実施にあたり医師等は、本学の協定校である北里大学（相模原会場）と順天堂大学（杉並会場）からご協力いただきました。学生・生徒、教職員をはじめ、ご家族や取引企業関係者等も対象に、相模原会場・杉並会場あわせて計4,465人が新型コロナワクチンを接種しました。



杉並キャンパス



『軌跡』

20 | 「JAGDA 国際学生ポスターアワード 2021」にて在学生在がグランプリを受賞

国内外の優れた若い才能の発見と顕彰、およびグラフィックデザインの新たな発展と進化を目的に創設された「JAGDA 国際学生ポスターアワード」。このコンペティションにて、本学在学生在12名（作品数14点）が入選いたしました。全世界から2,723点もの応募があり、その中から本学デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻4年生、岡田江里菜さんの作品が最優秀賞であるグランプリを受賞しました。

岡田さんは「Move」というテーマから、地層を「これまでの地球の動きの軌跡を可視化している」という考えをもとに連想させました。作品『軌跡』でも、同じように絵の具を自らの手の動きに沿って跡付け、断層に見立てて表現しています。また、グランプリ作品をはじめ、全ての入選作品が2021年11月24日～12月6日の期間、国立新美術館にて展示されました。

21 | 村岡貴美男教授 「再興第106回院展」にて 内閣総理大臣賞受賞

公益財団法人日本美術院が主催運営している日本画の公募展覧会「再興第106回院展」が、2021年9月1日～17日にかけて東京都上野の東京都美術館にて開催。応募された日本画作品297点の中から選ばれた入選作品と同人作品、計265点が展示されました。この展覧会にて、本学芸術学部美術学科日本画専攻教授である村岡貴美男先生の作品『循環』が、最高賞である内閣総理大臣賞を受賞しました。「再興第106回院展」は巡回展として、全国各地にて開催されます。



『循環』

JAM

女子美術大学美術館コレクション 柿内青葉展

2021.5.19(水) - 6.26(土)

フォトシティさがみはら第20回記念事業 ブラジル現代写真展
「コスモカオスー混沌と秩序 現代ブラジル写真の新たな展開」

2021.7.7(水) - 7.19(月)

相模原市と友好都市であるブラジルの写真家5人を紹介する
展覧会を開催しました。

女子美染織コレクション展Part9 舞楽装束

2021.9.29(水) - 11.6(土)

〈同時開催〉

コロナカ・コロナゴ写真展

会場: Joshibi SPACE 1900

女子美術大学の在学生在がコロナ禍に経験したことやコロナ後の想いを
Instagramで表現した写真展を開催しました。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#05 齊藤彩展

2021.5.14(金) - 6.16(水)

本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、齊藤彩
の作品を紹介しました。

国際彫刻交流展

2021.9.13(月) - 10.1(金)

本学教員とOG、国内彫刻家、イタリア、コロンビア、韓国、台湾
等、約20名の彫刻作品による交流展を開催しました。

女子美術大学短期大学部1年前期基礎造形展

2021.7.2(金) - 7.21(水)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した18講座の学生作
品を展示しました。

第14回 四大学合同写真展 ○(まる)展

2021.10.13(水) - 10.24(日) オンライン開催

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・中国伝媒大学の四つ
の大学でそれぞれ写真を学ぶ学生の写真展を紹介しました。

JAM

2021年度 女子美術大学退職教員記念展

2022.1.12(水) - 1.28(金)

2021年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2021年度 女子美術大学大学院

博士後期課程研究作品発表会

※開催は学位の申請状況により変更があります。

2021年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2022.3.9(水) - 3.14(月) *会期中無休 2021年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

女子美ガレリアニケ

2021年度 女子美術大学退職教員記念展

2021.12.3(金) - 12.22(水)

2021年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2021

2022.1.14(金) - 1.26(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生・
大学院生による卒業・修了制作の作品を紹介します。

2021年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2022.3.9(水) - 3.14(月) *会期中無休 2021年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

歴史資料展示室

2021年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み

2021.4.7(水) - 2022.3.18(金) *休室日 火・日・祝日

収蔵資料に加え、女子美術大学美術館収蔵女子美染織コレクションを随時数点公開します。

女子美術大学
美術館コレクション
柿内青葉展

2021.5.19(水) - 6.26(土)



柿内青葉展は新型コロナウイルス感染症拡大防止による
制限下での開催だったにもかかわらず、多くの方々にご覧
いただくことができました。大正から昭和にかけて活躍し
た青葉は、女子美の卒業生であり、母校で後進の指導に
もあたった本学ゆかりの日本画家です。本展ではご遺族か

ら寄贈していただいた作品や資料を一堂に公開する初の
個展となりました。当館所蔵の《十六の春》を、それが画家
とモデルの両者にとってかけがえのない思い出の作品であ
ることを綴った自筆の書簡とともに展示し、青葉と弟子で
ありモデルである女性との関係性を問う機会となりました。

JAM
展覧会報告
PICK UP 02女子美染織
コレクション展Part9
舞楽装束

2021.9.29(水) - 11.6(土)

女子美染織コレクション展は第9回目となり、雅楽の演
奏形態のひとつである舞楽に用いる華やかな衣装を展覧
しました。展示室内には、室町時代から現代までの舞楽
装束に加え、舞楽の舞台を原寸大で再現すると共に、現
在の演奏で着用される衣装をマネキンに装着して展示し
ました。天王寺楽所雅亮会(大阪府大阪市)のご協力の

もと、貴重な記録映像と50演目にわたる舞台記録写真
も紹介し、舞楽の豊かな魅力に触れられる多角的な空間
を構成しました。また、本展における関連イベント「舞楽
を楽しむ」では、展示室内の舞台にて大本山増上寺雅
楽会(東京都港区)による舞と太鼓や管弦の音色を披露
いただき、YouTubeでライブ配信を行いました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 林規章・佐藤真澄・松山智一
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社 ヒーローズ
発行日 2022年1月11日
© 2022 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <https://www.joshi.ac.jp>